

群馬の森の追悼碑強制撤去に抗議する声明

群馬の森にあった「記憶、反省、そして友好」の追悼碑が1月29日からの強制代執行により撤去された。負の歴史を反省し平和と友好を願う追悼碑を、なぜ今、「残してほしい」という多くの人々の願いを無視して強制撤去までしなければならなかったのか、群馬の森に追悼碑が存在することから生じる不利益とは一体どれほどのものだったのか、まったく理解しがたい。しかも芸術作品でもある追悼碑を一方的に破壊しておいて、強制代執行費用（3000万円）の負担を市民団体に求めてきたというのであるからあきれざるばかりだ。まさしく公権力による暴挙そのものである。

近代以降の日本では植民地支配や戦争を通じてアジアの諸地域に被害を与えてきた負の歴史がある。戦時中も不足する労働力を補うために朝鮮人や中国人を強制的に連れてきて、ダム建設や土木工事や軍需工場などで危険で過酷な労働を強い、怪我や暴力や栄養失調などで多くの命を奪っていった。日本国内にはこうした強制連行や強制労働の歴史が各地に残されている。群馬県にも岩本発電所の地下導水路の掘削現場や中島飛行機の後閑地下工場など多くの労働現場の跡が残されている。このような歴史を後世に伝えるために地元市民団体が2004年に県立公園「群馬の森」に「記憶、反省、そして友好」の追悼碑を建立したのである。碑は過ちを反省し、アジアの平和と友好を願うという極めてまっとうなもので、県議会の満場一致決議や県の許可を得て設置されたという経過がある。

ところが、2013年安倍政権下での閣議決定による「強制連行否定」がこのような歴史をなかったことにしたい人々の格好の道具になっていった。加害の歴史を否定するヘイト団体「そよ風」などが圧力をかけ、群馬県は碑の前で「強制連行の事実を訴えたい」という市民団体による政治的発言があったからと、設置許可を更新しないという驚くべき措置を取った。それに抗議して裁判で争われたが、2022年には県の処分を認める判決が最高裁で出された。それでも地元の市民団体はこの決定に屈せず、追悼碑撤去反対を広く（国際社会にまで）訴えて存続を求めてきた。ところが山本一太群馬県知事は存続を求める運動の広がりをおそれてか、新たな裁判が始まる直前に強制代執行に踏み切ったのである。撤去・破壊してしまえば訴えの利益はなくなると考えての実力行使なのだろう。

歴史歪曲の動きは実は他の地域でも起きていた。奈良県天理市にある柳本飛行場についての説明版も同じような攻撃を受け撤去されてしまった。その説明版には飛行場建設に従事していた朝鮮人が強制連行にあったことを示す証言が記されていたからだという。東京都立横網町公園にある関東大震災時の朝鮮人虐殺の追悼碑も同じ「そよ風」などが撤去を求めており今も攻撃を続けている。自国にとって都合のいい歴史しか見ようとしない「歴史修正主義」はヨーロッパなどでも移民排斥などと絡めて勢いを増している。しかし、たとえ負の歴史であれ歴史事実は消すことはできない。過去に向き合うことは同じ誤りを繰り返さないためにも極めて現代的な課題といえる。群馬県知事が強行した追悼碑強制撤去は世界に恥ずべき愚行であり、強制連行や強制労働を強いられた犠牲者や平和を願う人々への暴挙である。

外国人との共生社会の実現を求める私たちはこのような追悼碑強制撤去に強く抗議するものである。

2024年2月15日

NPO 法人在日外国人教育生活相談センター・信愛塾
理事長 李明忠